

コミュニケーションを重視した授業の源泉を探る

—桂元三の求めた学校教育—

高橋 道也

抄録：本 2020 年に実施される「新学習指導要領」では「主体的・対話的で深い学び」が話題になっている。北海道恵庭市立島松小学校で 50 年も前にすでに「コミュニケーション授業」と自称する手法を導入して「授業づくり」「学校づくり」に取り組んだ校長がいた。その指導は大いに評判となり、北海道の一地方の学校でありながら全国的に知られ、道内のみならず道外からも含め 10 年間で 9800 名を超える視察・参観者を集めた。その学校経営方針や教育観と課題認識は現在にも通じるものがあり注目に値する。桂元三という校長本人への興味もあるが、教師集団を高め、地域を変えながら、教育を推し進めるために用いた「コミュニケーション」という手法の今日的な有効性について考える。

キーワード：桂元三，コミュニケーション学習，教師集団，学校づくり，授業づくり

1. はじめに

「もはや戦後ではない（1956.7 第 10 回経済白書）」が流行語となり高度成長期が始まっていた。農業から工業への就業構造の転換期であり、総人口の 72.1% が都市に住む状況（現代社会文化研究 No.37 2006.12 p33）が出現していた。そのことを後藤（2006）は「世界でも稀な“都市化の波”が日本全土を覆い尽くした」と言っている。同時に「新しい家族像」つまり「プライバシーの尊重，マイホーム主義，養育過干渉，隣近所との相互不干渉，利己的，享乐的，物質的志向が増大していく一方で人間関係の希薄化や社会連帯意識の欠如が進行していった時代」だった，と総括している。第 5 回衆議院本会議（1949.3.29）の冒頭で法務大臣を歴任する衆議院議員の花村四郎が「現下青少年の不良化，犯罪化の傾向はまことに憂うべき，恐るべき事柄であります。」と述べている（後藤 2006）。しかし，行政的な「対策」（つまり，街頭での巡回指導・一斉補導・補導取り締まりの徹底・少年鑑別所や少年院の整備強化など）が社会教育と混同され整理されないまま進行した（後藤 2006）。昭和 58 年版（小），59 年版学習指導要領は，「教育内容の現代化」を標榜して，史上最も加重な教育内容を子どもに課した。やがてマスコミには「落ちこぼれ」という言葉が流布し，一方では，受験戦争などという言葉が多用される（交通戦争などという言葉もあった）。著者は昭和 56 年に教職についているが，成績の悪い児童について担任教師が「あの子も必要なんだ。あの子がいないと他の子に 1 をつけなくてはならないから」と会議で平然と語っていたのを記憶している。「一斉指導」や「知識重視の教える授業」が一般的であり「非行や落ちこぼれ」は「対策」の対象であり教育の対象ではない状況が 1980 年代まで続いていたということになる。基礎学力という言葉があったが，受験戦争という言葉も社会的に飛び交っていた。経済成長を成し遂げはしたものの，教育は荒廃していた。

2. 桂元三の略歴及び関連する資料について

2.1 桂元三の略歴

50年も以前、昭和38年から昭和47年の10年間島松小学校の校長として指導力を発揮し「コミュニケーション」という学習形態を授業に取り入れ、大きな成果をあげた桂元三（以下 桂）とはどのような人間であったのか。恵庭市政40周年記念誌「恵庭人 恵庭の歴史を刻んだ人々」（2010.12.15.53p-56p）によると、桂は、1912年7月11日青森県弘前の女学校教師である省三とトメの子として生まれた。桂が小学2年のとき、父がスペイン風邪で亡くなり、長男や長女が暮らす樺太に移住した。1931年樺太教員養成所を卒業し、樺太で豊原尋常小学校の教壇に立った。その後セツと結婚、一男一女に恵まれた。敗戦後の引揚で札幌市立琴似小学校に赴任した。40代という異例の早さで校長になり、北海道石狩管内の小・中学校の教育に携わり1973年3月退職した。教職生活の最後の10年間である1964年4月から1973年3月まで北海道千歳郡恵庭町立島松小学校（現在は恵庭市立島松小学校）の校長として経営と実践指導で手腕を発揮した。この資料は、恵庭市在住の野口栄子氏から譲り受けたもので、野口氏はこの記念誌作成の際に桂について「話をしてくれた人」に名前を連ねている。彼女は、島松小学校に勤務し、直接桂の指導下で指導に当たった教員の一人である。桂については、児童を育てるためにはまず、教師集団を高め、学校を変え（桂の言葉で言えば「変革」である）、地域・保護者の意識改革が必要との姿勢を一貫して貫いた理念の人でもある。その「コミュニケーション」を取り入れた実践は多くの教員の賛同と共感を得た。島松小学校の前任校時代から学校の独身男性教員を夕飯に招いたりしていたが、島松小学校時代には、女性教員たちも桂宅集まった。夜には近所の人たちも集まり酒を酌み交わすなど「交流」を大切にしていたようである。貧しい家庭の子供には密かに学生服を買って着せ、修学旅行にも行かせたりもした。退職後は、1973年4月より北海道大学教育学部、1976年4月からは北海道教育大学札幌分校、岩見沢分校講師（講演の記録や聴講した学生の感想などが多く残っている）、1984年3月にそれらを退き、北海道内外の小学校で教育実践の指導にあたった。1991年5月15日78歳で心不全のため生涯を閉じた。この桂の話の本学鶴岡記念図書館館長及び大学院こども発達研究学科科長の三上勝夫（以下三上）から聞いたことが本論文を書くきっかけである。三上は自身が大学院時代に島松小学校で桂の指導を受けた経験を持っている。

2.2 桂元三の著作及び現存する資料について

桂が現恵庭市立島松小学校の校長に赴任したのは1963年（昭和38年）のことである。退職までの10年間に及ぶ取組の大半は失われて伺い知ることはできないが、機関紙「開拓者」（学校運営編や公開研究会誌として年に数回発行されていたようで、現在、そのうちの10冊ほどが手元にある。）や退職後の著作、同僚たちの編集による資料などがあり、当時の雰囲気を知ることができる。著作は明治図書からの出版がほとんどである。学校運営編の「開拓者」はページ数がほぼ同じで、60pから65pである。現在では電子化されているが、最近までは毎年4月に担当者が作成し冊子にして、職員会議等で使用するものである。「開拓者」はその全てがガリ版印刷の手作りである。印刷部数も職員数に幾らか上乘せした程度であろう。残存部数の少なさから、五十余年という歳月の長さを感じるが、それらを手に取ると時代の移り変わりの速さ・環境の違いの大きさも同時に感じることができる。

以下に蒐集できた資料を列記する。

開拓者：昭和 41 年度版
 昭和 42 年度版
 昭和 42 年度版「第 3 回公開研究会のまとめ No.22」(1.18)
 昭和 43 年度版「第 4 回公開研究会号 No.25」(10.13)
 昭和 44 年度版
 昭和 45 年度版
 昭和 46 年度版
 昭和 46 年度版「第 7 回公開研究会号 No.39」(10.3)
 昭和 47 年度版
 昭和 47 年度版「第 8 回公開研究会号 No.45 の 1」(S48.2.10～11)

「開拓者（学校運営編）」の目次を以下に列記すると以下のようである。

| | |
|---------------|----|
| I 教育目標 | |
| 学校経営の方針 | 1 |
| 教育の目標と方針 | 3 |
| 本校教育の目標と方針 | 5 |
| II 教育推進の重点と方策 | |
| 学校経営の重点と方策 | 9 |
| 重点年次計画 | 12 |
| 校内運営組織 | 17 |
| III 研究推進と運営 | |
| 研究推進の基調 | 19 |
| 研究主題 | 20 |
| 研究体制 | 21 |
| 研究運営 | 21 |
| 継続研究教科（音・図・体） | 22 |
| IV 部経営の重点と計画 | |
| 図書部 | 28 |
| 文化部 | 29 |
| 保体部 | 30 |
| 学習部 | 31 |
| 生活部 | 32 |
| 放送部 | 33 |
| V ブロック・学年経営 | |
| 低学年ブロック | 34 |
| 中学年ブロック | 39 |
| 高学年ブロック | 44 |
| 進度表 | 49 |
| 学校運営 | 61 |

この「開拓者」の目次は、ほぼ現在まで受け継がれている形であり、これらからは「全国的に有名になった学校の姿」をうかがい知ることはできない。つまり、この運営編は、通常の業務を集約したものであるから、授業研究は「研究の推進と運営」の項目に記載されているが、事務的な表現で書かれていて、年間計画や業務の分担などである。日常の業務の業務内容である。つまり、桂の取り組んだ授業改善は、これらを遂行しながら行われ、その上で大きな成果を挙げている、ということは理解できるであろう。それは、職員にとっては大きな負担を強いたのではないかと、思っていると、それについての記述がある。桂は「ある日の午後5時ごろ、女教師の一人が、職員室でお金を数えている」姿を見て「なんと8種類もの集金と市販のテストの採点が二山あり、二歳の子どもが帰りを待ちわびている」状況で「授業の準備など望むべくもない」と困惑し、昭和39年以降（赴任した翌年）学校事務の合理化に取り組んだ。その項目は10項目にもなり、学校事務と学級事務の合理化を果たしている。その能率化を「驚異にも近い出来事」だったと記述している。次に会議を合理化し、「授業準備の時間」を作りだしていった。学校運営編の他に公開研究会号があった。参加者の感想が収録されていて興味深い。それは別の機会にする。「開拓者」という名称が付けられたが、その意義についての記述があるので長文であるが以下に抜粋する。誌題の意義は、第一回公開研究会号の序文に次のように述べられている。「開拓とは、未知、未墾の世界を切り開き、新しい文化や土地を切り開き、新しい文化や土地をつくり出すことと解釈するならば、それは容易なことではなく、自己または、その集団に対してもきびしさが当然要求されるわけである。…(中略)…今日、日本のホープとか若い北海道とかいわれ、その開発の急務が叫ばれているが、それは北海道には新しい可能性が多いことを示しているのである。しかし、それらの声は、北海道開拓者の子孫である今の世代の人びとから強く叫ばれているようには思われない。むしろ一般的に彼らは安定した生活になれ、創造の精神や開拓の気迫というものを見失っている現状ではないだろうか。教育においても、北海道の学力の低さ（ほんとうに低いかどうか異論もあろうが）の原因についての新聞の報道に、広い自然環境に、おおらかな教育がおこなわれ、きびしさがたりなくなっている云々…の一項があったが、本州のすぐれた学校のいくつかを見た目からみて、たしかにうなずかれることである。若い北海道の学校や子どもをかかえているわれわれは、正しい見とおしと、開拓者精神につらぬかれたたくましい力と団結をもってするならば、必ずや本当の意味の教育の創造も可能なのではないだろうか。本校教育の望ましい人間像の中に「開拓者精神に培われた…」のことは、われわれ島松小教師団のきびしい実践から生まれたものであり、本州のすぐれた教育実践に学ぶこともたいせつであるが、われわれの力で北海道教育を創造し、心身共に強靱な、道産子を育成したいとの念願を、この誌題にこめたのである」(「子どもを変革する教育」北海道島松小学校著 106p - 107p 1967.9)。そのNo.1は昭和38年の10月に随筆集として発刊された。昭和38年は桂が校長として赴任した年である。編集代表は桂であり、「民主的な学校経営」を方針としながらも、全員参加の随筆集である。桂の校長として「学校づくり」にかける思いが伝わってくる。退職するまでの10年間で45号まで発刊された(学校経営編には通し番号がないので公開研究会号で確認)。その主な目的は、「教師は記録を取ることによって、自らの思考・実践をより確かなものにする。また自らのもっている考え、実践、問題をみんなの前に提供して、集

団の論議によって自他共に高まっていく」ためのもので、それが「このような考えのもとにはじめた機関誌であるが、教師・教師集団のよき糧となった（「楽しい学校 わかる授業」21p）」と言っている。教師たちの「よき糧」となった「公開研究会号」は残念ながら記録にあるように「昭和42年度版」「昭和43年度版」「昭和46年度版」「昭和47年度版」の4冊が現存しているに過ぎない。手元にある全てが謄写版（ガリ版）印刷の手作りであるため、劣化損傷がひどいものや、印刷が不鮮明で判読できない部分のあるものがある。当時教員として実践に当たられていた野口栄子氏（前出）、喜志文雄氏を三上から紹介され、その際に譲り受け、PDF化した。また、桂の著作については、梅津（本学人間科学部こども発達学科教授）、佐藤公昭（本学こども発達学研究科大学院教授）から譲り受けたものも含まれる。この場を借りて感謝を申し上げたい。また、島松小学校教頭松田宏明氏（平成29年時点）から、学校に保存されていた「開拓者」（昭和41年度版・昭和42年度版）をお借りした。重ねて御礼申し上げたい。

著 作：桂元三「きょういくの本 1巻 美しい教育」1985.8 明治図書出版
桂元三「きょういくの本 2巻 美しい授業」1985.9 明治図書出版
桂元三「きょういくの本 3巻 美しいのち」1986.1 明治図書出版
島松小学校代表桂元三「子どもを変革する教育」1967.9 明治図書出版
島松小学校代表桂元三「子どもを変革する授業」1969.9 明治図書出版
島松小学校代表桂元三「楽しい学校 わかる授業」1975.3 明治図書出版

その他の文献：

島小の授業 斎藤喜博編 昭和37年12月15日 麥書房
集団思考過程の研究 砂沢喜代次 昭和42年10月 明治図書出版
小学校のバズ学習 その実践的研究 塩田芳久 豊川市立中部小学校共著昭和40年6月15日 黎明書房
文集：桂元三先生の講義を聞いて 渡邊守夫編 北海道教育大学岩見沢分校総合教育第一研究室および北海印刷 1986.2.10

3. 資料から桂元三の学校経営を探る～

桂はその著書「楽しい学校 わかる授業」のまえがきで「島松は名もなき一地方の小学校である。ごく平凡な教師たちが、全知をあつめ、学びあって実践しこまできたというにすぎない。いろいろな領域で、素晴らしい実績をあげている学校はたくさんある。学校づくりにおいてもやる気さえあれば、ここまではどの学校にもできるのではないだろうか。」と語っている。「全知を集める」ことや「学び合って実践する」ことで成し遂げた、そして、学校づくりも「やる気」の問題だと語っている。だが、「ここまでは」という言葉に込められた思いはなんだろうか。そのあたりについてはさらに資料の検討が必要だ。「楽しい学校 わかる授業」は、1975年（昭和50年）3月が初版なので、昭和48年3月で退職し、休む間も無く著作に、講演にと活躍していたことがうかがえる。桂は自身の10年間を振り返り「公開研、公開日、日常訪れて下さった小学校・中学校・高校・幼稚園・PTAの方々か延9700名に及び、その都度、批判・感想をいただき、どんなによいはげましとなったことか、厚く御礼申し上げる。」と述べている。島松小学校は一地方の学校であったかもしれないが、“名もなき”

ということではないと思われる。この著作の第二章に「十年の学校経営をかえりみて（昭和48年2月10日 第八回公開研究会講演）」が収録されている。特に、「子どもを変革する教育」（1967.9 明治図書出版）において、桂の学校経営が明確に語られている。どちらにも共通しているのは「勉強嫌い、学校嫌い、非行につながる。（同22p）」ということが明白になっている状況下で「教える教育より学ぶ教育が叫ばれても一斉授業の型はなかなか破れない（「子どもを変革する教育」24p）」という危機感である。そこで桂は赴任早々に学校作りに取り掛かる。その基本は「わかる授業」である。それには研究が必要であるが、桂は教育実践者の研究について「教育学者の研究や各分野の専門家の研究とは違う」とした上で、「私たちの研究は学習する子どもから離れては成立しないのだ。」と言っている。この事は、島松小学校の学校作りにとって重要である。「したがって研究そのものは、授業実践の中で濾過されて出てきたものでなくてはならない。」「研究すなわち授業。授業すなわち研究」と言っている。教師集団について「ひとりの問題はみんなの問題であり、ひとりの研究がみんなに支持され、育てられるという教師集団（同22p）」でなくてはならないと言っている。6年生で転校してきた児童が卒業までに本がすらすら読めるようになった事例を取り上げていて（同22p）、児童観を統一して指導に当たる事で「子どもの見つけ方」を変えることができると考えたようである。そして、それは、教師集団を高めることでもあった。

3.1 赴任当時の状況（昭和38年）

桂の時代は非行や教育の荒廃などもニュースになっていたことを考えると、小学校のあった島松地区も容易ならざる状況にあったはずである。当時の青少年非行は、既存の権威に対して「暴れた」ことから「対策」の対象となった。「開拓者」（S41版）の学校経営方針（二）地域社会の課題に立つ教育 という項目に「すでに恵庭市街には相当の非行児の発生がみられるが、やがては島松にも浸透が予想される」「学校教育の課題としてきわめ、解決しなければならない」との記述がある。反社会的な行動を顕在化させた若者たちと現在の引きこもる若者と比較すると真逆の姿と見ることができるが、実はどちらも「コミュニケーションから乖離した姿」と捉えると、そこに時間を越えた類似性を見ることができる。また、保護者の過保護・過干渉などという言葉や「教育ママ」などという言葉も飛び交っていた。現在では、クレーマーやヘリコプター・ペアレント、学力編重、逆にネグレクト、子育ての外注などという言葉が、それらと重なる。子どもたちの孤立した姿に相違はない。かつては農業地帯であった島松であったが、桂の時代にはその割合は二割程度であり、そのほかは商店街の住人と自衛隊に勤務の家庭であり、経済力の差が生活層の差となって存在していた。桂はそんな時代に校長として学校経営、実践指導に当たっていたことになる。桂が着任した年の全校朝会の状況は、当時の教師の記録からうかがい知ることができる。担任が朝会後に感想を書かせたものが収録されている（「子どもを変革する教育」16p）。児童の感想文であるが、学校の状況が手に取るように伝わってくるのでそのまま抜粋する。

M子：「おわるまで静かに聞いてほしい」と校長先生がそういったのもむりはないと思う。校長先生の新任式の時も、うるさかったのを我慢していられたのだと思うから。

A君：この前の新しい一年生を迎えた対面式の時もうるさかったので、きょうの朝会での校長先生の話はそのことを注意してほしかったにちがいないとおもった。うるさい時になぜ

先生方がおこらないのか、新しい先生方にみられながら注意するのは、みっともないのか、ぼくにはわからない。

MI子：校長先生は話しながら心の中で「だらしのない学校だな」と思ったろう。私も校長先生だったら同じ気持ちだろう。私たちがだらしなかったら、受け持ちの先生もはずかしいだろう、と思いました。

MA子：「朝会のあいだ、ひとこともおしゃべりをしないでごらん」と校長先生がいった時、「どうしてそんなことをいうんだらう」と思って考えました。考えれば考えるほどわからなくなりました。でも、自分の実力をたしかめてみようと思いじっとしゃべらずにきいていました。まわりが静かなので話せなくなりました。

「子どもたちが乱れているのをうれい（子どもたちには「何とかしよう、このままではだめだ」という気持ちが芽生えていたことを示している）、しかも教師に向けて欲求をもっていることがわかる（痛烈な教師批判として読むことができる——引用者）（「子どもを変革する教育」16p）桂は子どもたちの乱れは教師たちのせいであるといい、その原因は教師たちの意識の無統一、方法への無関心、準備の悪さにあると指摘し、腰の引けた指導者を「実践に自信のない教師は、父母の要求にしたがってしまう」と表現している。きびしい言葉である。また、通知箋の通信欄に書かれていた言葉から、学校教育と家庭教育の使命が逆転している事例を抜粋している。

- 算数（比）がよくわかっていないようです。休み中はじめからやらせてください。
- 本が読めません。うちでたくさん本を読ませてください。
- 恐怖心が先にたって、マット運動や、跳び箱をとぶことが不十分です。
- 授業中おちつきがたりません。
- 朝会の時、整列が早くできないようです。

（昭和38年度の本校通知箋から）

このような教師たちの状況を「教師が学校で指導してもわからせられないものを父母ができるであろうか」とつよく批判している。「教師が専門性を放棄している」と嘆いている。桂の学校づくりはこのような状態から始まったと思われる。

3.2 コミュニケーション授業にいたる経緯

「桂元三 きょういくの本 第2巻美しい授業」の中で桂の学校づくりを「偉大な非常識」と表現している（59p）。ランドセルの廃止、宿題なし、かわった卒業式などが注目されていたようであるが、それは「教育の方針、あるいは全体の教育運営という見地からはなかなか論じられない」と言っている。「自ら学ぶ子どもたちの育成という目的に立って、授業の質を高めることにより子どもを変えていく実践を進めていくとき、突き当たる問題」として「保護者の過干渉」があり、保護者の要望によって宿題を出しても「宿題によっては学習習慣がつかない」こと、日常の実践の発揮が授業であれば、学校行事も同じであり「学校行事の主役は子どもたちである」という方針のもとで、教師たちは授業に打ち込んでいた。第3回公開研究会号の中に、参観者からの感想が収録されている。教育大学旭川附

属小学校の教師からは「わたしたち教師集団の中によりかかり教員のいる弱さをもっている。貴校でよりかかり教師をどのように克服しているのか教えてほしい」という切実な質問であるが、これに答えるのは難しいと判断したのか、質問への答えはない。苫小牧西小学校の教師からは「精神薄弱児を含めて、ひとりひとりを大事にするという立場から考えて、特殊学級を設置し、全校的なコミュニケーションの中で、それら知恵遅れの子の社会的自立をめざすべき」という意見、夕張の教師からは生活指導と道徳教育の中で非行対策についての質問も掲載されている。参観者の中からは「効率よく学力高めるには、バズ学習（コミュニケーションを重視した授業で対話場면을「バズ」と称していた）はどのようなか」と疑問を呈する意見もあり、島松小学校の教員たちが成し得た実践の状況を「教材の科学性」と「教師の教材研究」という点から「この学校のウィークポイントである」との意見も掲載されている。一方で「そういうことがあっても子どもたちが相当に意気込んで勉強するのはなぜだろうか。」と鈴木秀一氏（北海道大学教育学部教授）が反論している。この意見の対立は、特別支援学級を担当していた筆者の立場で見ると「子どもの興味関心や実態」を基盤にするのか「確かな学力」を一義とするのかの違いに見える。この辺りの対立は「いつか統一されるのだろうか」（鈴木）という投げかけで終わっているが、50年間、解決はしていないのではないかと。いろいろな意見がある中で、桂は、島松の生活環境や住民の状況、子どもたちの実態を校長として捉え、一つの「授業の形態論」に行き着き、それを島松の教育として実践し、参観者を驚かせる学校づくりをおこなった。それが「コミュニケーション・バズ」という手法である。

4. コミュニケーション・バズ学習とは

コミュニケーション授業は、バズ学習を取り入れる教員もあられ、多様化する。「バズ学習」についての研究論文を入手するのが難しいが、前述の喜志氏から譲り受けた「小学校のバズ学習」（塩田 1965, 6）が大変参考になる。この調査研究は、名古屋大学教育心理学教室の塩田芳久と豊川市立中部小学校の職員たちとの共同研究である。その研究から集団機能が十分に発揮されて、個人が学習に強く動機付けられるようになるためには、集団内の相互作用に必要な要素としてわかったことが5点列記されている。

- ①集団内に自由なコミュニケーションが活発に行われるようになること。
- ②全員が共通の価値体系をもつようになること。
- ③つねに協力的な努力への調整がなされること。
- ④失敗の際にとるべき努力の仕方が学ばれること。
- ⑤グループの全員が満足するような活動への調整がなされること。

このような要素が確立していて、交互活動が活発に行われている集団では、メンバーは相互に信頼と愛情で結ばれ、望ましい集団目標と集団基準を発展し、いわゆる強い凝集性と高い士気を示す。（同 38p）加えて、学習面で批判もあったバズ学習であるが、これに対する項目「学習に対する参加度」（150p）という項目を抜粋する。

質問紙による調査が主体になっていて、その結果から「バズ学習体制は、伝統的な一斉学習体制よりも、児童にとってはより魅力的なものであり、したがって、その学習活動への参加度もいっそう高い。これはわれわれの予想通りの結果」であるといっている。この研究には4項目の仮説がありそれを検証するという形になっている。以下にその仮説と結果を抜粋する。

仮説 (1) 「バズ学習体制は、一斉学習体制に比べて、児童の学習に対する参加度をいっそう高めるであろう。」を実証するものであった。調査の主な結果として「バズ学習に対する魅力を興味、理解、相互影響の三側面にわけてみると、児童にとって、もっとも魅力的だったのは、相互影響の側面である。」と述べている。

仮説 (2) 「バズ学習体制をとり入れることによって、児童の学習成績はいっそう進歩するであろう。」については、能力別にみると、上・中・下の三群とも大差なく、いずれも一斉学習に比べて、より優れた効果を示している。強いていけば、中位群の効果がやや著しいようである。」と述べている。

仮説 (3) 「バズ学習体制をとることによって、児童の対教師、対仲間、対学校の態度により望ましい方向の変化がみられるであろう。」では、「バズ学習の意義や価値を認め、積極的にこれを受け入れている」と考えられ、「児童の仲間に対する態度も、バズ学習によって、より好意的な方向に変化する傾向を認めることができる。」と結論付けている。

仮説 (4) 「バズ学習体制を取り入れることによって、学級は、学習のための集団として望ましい社会的構造を発展するであろう。」では、「学級の社会的接近構造（相互の心理的結合とコミュニケーションの関係）については、かなり明確にバズ学習体制の優位を認めることができた。すなわち、バズ学習体制をとった学級は、ほとんど例外もなく、その接近構造は望ましい方向へ変化している」と述べている。

これらの事を踏まえて「バズ学習体制は、学級を学習のための集団として、その望ましい構造」を発達せしめるために有利である。」と結論づけている。

4.1 桂が「コミュニケーション・バズ学習」を採用した動機

学校経営の部分で桂が何度も繰り返している言葉がある。それは「三者一体の学校づくり」である。その三者とは、「学校は、教師、子ども、父母」だといっている。現在の感覚から言えば、当たり前のことである。これは50年前の実践であるのだと、時々、思い出さないと時間感覚を失う。桂は「この三者が共通した目的と意思を持って、共に高い次元に進んでいける学習集団にしよう」と言っている。この点から考えると、現在はどうかであろうか。保護者は学校にとって、そのような存在というよりは、保護者の意向が学校の方針を左右しているように見えなくもない。学校づくりの中心は、授業である。教師の授業力の向上である。ここに桂のねらいがあったのではないか。当時の教師たちは「コミが回る」「バズが回る」と表現していたようである（三上 談）、つまり、教師たちを「教え込む」「一斉指導」から見事に脱却させ、子どもたちが授業で意欲的になり、楽しく学ぶことができるようになり、その姿を保護者に見せることで、地域と一体となって共通の目的と意思を作り上げ、実現したということであろう。学ぶことを楽しむ子どもたちの中からは非行児は出てこない。生活層の差から仲間はずれにされることもなくバズ学習の中に入ることができ、理解に困難さがある場合も「仲間として受け入れる集団」が育っていたと思われる。校長として「良い学校」にするための手立てとして「コミュニケーション・バズ学習体制」は最良のものだったと思われる。

5. 考察

「主体的・対話的で深い学び」を考えると、この「コミュニケーション・バズ学習体制」と共通する点があることに気がつく。学習への参加度を高めるという点、仲間に対する好意的な態度、学習のための望ましい集団。そして何より「意欲が高まる」という点である。そして、「教え込む」「一斉授業」の打破である。つまり、桂の実践から考えると、「主体的・対話的で深い学び」への取り組みは、まず、教師を変革するという大きな目標があったということになる。桂は、そのために学校改革として、学校事務、学級事務、会議などの「授業づくり」の時間を奪っているものを合理化していった。合わせて「開拓者（公開研究会編）」などを通して民主的に話し合うことのできる教師集団を作っていった。参観授業や行事などを通して地域とのつながりも変革していった。つまり、一教師の授業だけを改善しても、学校教育を向上させることはできなくて、学校として向上しないと子どもは変革できないのではないかとの思いで指導に当たっていた。桂が島松小学校の授業を改善するためには、三者一体が必要だといっていることは重要である。地域・保護者と子どもと教師が分かちがたく一体のものだということである。良い教育とはそれらの重なりを支えられて実現するというを50年も以前に実践し実現していたということは、再評価されるべきことである。手元にある資料には実践の具体的な記述が多くあり、元教師たちのインタビューについても今後の課題である。最後に、自分は特別支援学級の担任として長年勤めてきたが、コミュニケーションの指導ではなかなか満足のいく指導ができなかったという思いがある。この桂の実践を参考に考えると、三者一体の授業づくりになっていなかった部分があったのではないか。学校づくりと一体化していなかったからではないか。桂たちが取り組んだ実践は2020年度での新しい取組の成否を予想させる。今後は、このあたりを含めて、さらに掘り下げていきたい。

文献

第10回経済白書 1956.7

後藤雅彦 戦後社会と青少年行政の変遷—青少年の「健全育成」から「市民育成」への転換—「現代社会文化研究」No.37 2006.12 29p-41p

恵庭市政40周年記念誌「恵庭人 恵庭の歴史を刻んだ人々」(2010.12.15.53p-56p)

北海道千歳郡恵庭町立島松小学校編 代表者 桂元三

開拓者：昭和41年度版

昭和42年度版

昭和42年度版「第3回公開研究会のまとめ No.22」(1.18)

昭和43年度版「第4回公開研究会号 No.25」(10.13)

昭和44年度版

昭和45年度版

昭和46年度版

昭和46年度版「第7回公開研究会号 No.39」(10.3)

昭和47年度版

昭和47年度版「第8回公開研究会号 No.45の1」(S48.2.10～11)

桂元三「きょういくの本 1巻 美しい教育」1985.8 明治図書出版

桂元三「きょういくの本 2巻 美しい授業」1985.9 明治図書出版
桂元三「きょういくの本 3巻 美しいのち」1986.1 明治図書出版
島松小学校代表桂元三「子どもを変革する教育」1967.9 明治図書出版
島松小学校代表桂元三「子どもを変革する授業」1969.9 明治図書出版
島松小学校代表桂元三「楽しい学校 わかる授業」1975.3 明治図書出版
斎藤喜博編「島小の授業」1962.12.15 麥書房
砂沢喜代次「集団思考過程の研究」1967.10 明治図書出版
塩田芳久 豊川市立中部小学校共著「小学校のバズ学習」— その実践的研究—1965.6.15 黎明書房
渡邊守夫編「文集：桂元三先生の講義を聞いて」北海道教育大学岩見沢分校総合教育第一研究室および
北海印刷 1986.2.10

Exploring the Origins of Communication-Focused Instruction

- The School Education Sought by Genzo Katsura -

TAKAHASHI Michiya

Abstract: Within the "New Course of Study Guidelines" which will be implemented in the year 2020, the topic of "subjective, interactive, and deep learning" is receiving attention. 50 years ago, at Shimamatsu Elementary School in Eniwa, Hokkaido, there was already a school principal working on instruction development and school development through a method which he called "communication instruction." His leadership was talked about widely, and although it was only a rural school in Hokkaido, Shimamatsu Elementary became known across Japan, attracting over 9,800 observers and visitors from both inside and outside Hokkaido over a ten-year period. Elements of the school's administrative policies, pedagogy, and recognition of important issues are relevant even today, and are worthy of attention. While the school principal Mr. Genzo Katsura is himself an interesting topic, this paper will consider the modern effectiveness of the method called "communication instruction," which he used to advance education while improving teacher groups and changing the community.

Keywords: Genzo Katsura, Communication Instruction, Teacher Groups, School Development, Instruction Development